文化・芸術

「Y市の橋」
1944年2月、鉛筆、墨、木炭・紙
37・8㌢×45・5㌢（個人蔵）

《名画の扉》

大川美術館企画展「生誕110年記念 松本竣介デッサン50」から

松本竣介（1912～48年）

「何よりも建物の立つてゐるといふことが僕にとつて最も大きな魅惑なのだ」と語っているように、松本竣介にとって、建物や橋、運河などの建造物は、生涯にわたり魅了され続けたモチーフでした。

1941（昭和16）年ごろを境として、「建物」はその画面の中で大きくクローズアップされて描かれるようになります。本作は、横浜駅近くを流れる新田間川に架かっていた月見橋を描いています。

この橋を竣介は、戦中から戦後まで、遠近感や風景の大小、位置関係を変化させながら油彩、素描ともに繰り返し描きました。本作では、鉛筆、墨、木炭を駆使した濃淡が美しくその静謐（せいひつ）なたたずまいが独特の密度で表されています。

鉄骨が複雑に入り組んだ隙間には、橋の上を歩く黒い人影が描かれています。戦中の竣介の寂寥（せきりょう）感が投影されているような一点です。

（小此木）